

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	藤田美術館蔵本絵詞『阿字義』解説・翻刻並びに索引
Author(s)	佐々木, 勇; 寺田, 守; 小松原, 有子; 馬野, 奈緒子; 広島大学 日本語史研究会,
Citation	訓点語と訓点資料 , 109 : 26 - 79
Issue Date	2002-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00025058
Right	
Relation	



藤田美術館蔵本絵詞『阿字義』解説・翻刻並びに索引

佐々木 勇・寺田 守
小松原有子・馬野奈緒子
広島大学日本語史研究会

大阪市の財団法人藤田美術館に、重要文化財『紙本著色阿字義』一巻が所蔵されている。

その全体のカラー写真が、幸いにも、『続 日本絵巻大成 10』（一九八四年、中央公論社）および『続 日本の絵巻 7』（一九九〇年、中央公論社）に、収められている。ともに、現在も中央公論新社から出版されており、入手可能である。

『紙本著色阿字義』は、文化庁の重要文化財指定名称である（絵画として指定された）。ただし、近世以降、「阿字義」「阿字義伝」と呼び慣わされており、右の複製本でも「阿字義」としている。

本稿では、この通称に従い、単に「阿字義」と呼ぶ。

本稿は、絵巻『阿字義』詞書きの国語資料としての重要性に鑑み、先行研究に導かれて若干の解説を付すとともに、翻刻・語彙索引・漢字索引を作成したものである。

藤田美術館蔵本絵詞『阿字義』解説

一、書誌

1. 装丁・法量

本資料について、詳しく論じたものに、次の文献がある。

- 文献1 松原茂「經典絵巻の種々相」（『続 日本絵巻大成 10』所収）
文献2 小松茂美「解説」（『続 日本の絵巻 7』所収）
文献3 成原有貴「阿字義絵の詞書編者と絵をめぐる新知見」
（『佛教藝術』二二一号、一九九三年十一月）

以下、文献1・2・3として引用する。

書誌については、ほぼ、文献1・2に記されているとおりである。（藤田美術館のご高配により、原本閲覧の機会が得られ、直接確認することができた）。

本稿に取り上げた『阿字義』は、一卷十六紙の卷子本である。本の紙の料紙は、斐紙で、茶または紫に染められたものを、交え用いている。複製本に見られるとおり、料紙には金銀切箔等の装飾をほとんどしている。

各紙の寸法は、次の通りである。

縦、二十六・〇cm。各紙長は、第一紙から順に、四六・〇cm・四五・〇cm・四五・二cm・四五・〇cm・四四・九cm・三二・三cm・四

四・九cm・四五・七cm・四四・〇cm・四七・一cm・四七・二cm・二七・〇cm・四五・一cm・四五・一cm・四五・二cm・四〇・六cmである(文献1と小異がある)。

第六紙と第十二紙とが、特に短い。

2. 本文の構成

現在一卷とされているこの絵巻は、「阿字義」「阿字功能」「浄三業真言」から成る。

本書一行目に記され、全体の内題のごとくであったため、本書の一般呼称ともなっている「阿字義」は、巻頭の八行分の題目にあたる。それに続き、第一紙の途中から第六紙末までが「阿字功能」、第七紙に「尼像」、第八紙に「公卿像」、第九紙からが「浄三業真言」となっている。ただし、「阿字功能」は第六紙末の文章が途中で切れており、続きが存したであろう事と、第十三紙一行目(全体では一六七行目)からは「浄三業真言」の内容と異なるため、項目名を含んだ欠失が存することが指摘されている(文献1)。

第六紙の長さが短いのは、引用の途中で用紙が切断されたためであろう。また、第十二紙が短いのは、「阿字功能」の続き、または、別話が途中まで書いてあったものを、切断したためであろう。

また、二枚の絵は、「阿字功能」の本文に対応しており、阿字観を純熟した尼と公卿の姿を写している。「物語絵の中の人物の図様をイメージ・ソースとし、更に宗教的な図像を重ね合わせ、阿字観を表現する絵として新しく特別に制作されたもの」(文献3)と言われている。

3. 本文の内容

ア. 阿字義

梵字第一字「𑖀」の意味を説く。この阿字は、菩提心であり、大日如来の法界の身体そのものである、とする。

イ. 阿字功能

阿字を観する方法と功德とを述べる。阿字を観することにより、死者が生還する「下の功德」、虚空にのぼり十方にあそぶ「中の功德」、および無上正覺にいたる「大の功德」が得られる、とする。末尾に、「唐房法橋御消息」の二行が引かれる。

ウ. 浄三業真言の前半(100〜166行目)

「浄三業真言」を冒頭に掲げ、その意味を記す。この真言を唱えれば、諸法の清浄さゆえ、自身も清くなり、三悪道に落ちることがない、と解説される。

エ. 浄三業真言の後半(167行目以降)

法華経の安楽世界と念仏とについて、説かれる。念仏とは、仏の「無量寿命」を念ずることである、という。最後に食肉の悪であることを述べる。

ここで、ウ部分の「浄三業真言」について、補足する。

引用の真言は、次の陀羅尼の音写である。

oṃ svabhāva śuddhah sarva-dhama svabhāva śuddhoṃ

本文、一〇一行目では、次のように写されている。

唵(フツ) 縛(ハ) 婆(ト) 輪(マ) 駄(カ) 薩(サ) 縛(ハ) 達(マ) 薩(ト) 縛(ニ)
婆(ト) 縛(マ) 輪(マ) 度(カ) 含(カ) (101)

(以下、本資料用例の下に()に入れて所在行数を示す。) 真言に付された墨仮名には、朱仮名が上書されている。

しかし、この真言を解説した箇所では、他の訓点同様、墨仮名の

「二二合」も略され、娑縛婆縛秣駄薩縛達磨(131)・娑縛婆縛度合(134)とある。用字も異なる。

この「浄三業真言」は、諸種修法の基本となる「十八契印」の第一印に伴うものである。本資料本文にも解説されているとおり、一切の法が清浄であるため、自身も三業(身業・口業・意業)。本資料本文では、「身語意」の清浄を得る、という意である。基本的な護身の真言で、古くから、よく行われたらしい。

仮名書きの一例を、天理図書館蔵『シヤカニヨライネンシヌノシタイ(釈迦如来念誦次第)』(188.4139) 鎌倉中期写本から挙げる(原本調査に依る)。

シヤウ・サンコウノ・シンコン・ヲノ・ヲノ・一ヘンヲ・シユウセヨ
シンコンニイハク

ヲーム(オ)ソ(ト)ハ(ハ)ハーム(オ)ハ(ハ)シユ(エ)タ(ハ)サ(ト)ラハ(エ)タ
ーラ(マ)マ(ト)ソ(ト)ハ(ハ)ハーン(オ)ハ(ハ)シ(ト)エ(ト)カ(エ)ーム・

仮名音写・声点加点ともに、本資料とは異なる。平安中期以後、陀羅尼の声点は、文献ごとに様々であつたらしい。

4. 伝来

本資料制作時の所蔵者は、不明である。しかし、「模本や詞書 of 原典に、九条家関連の人々の名が頻りに登場する点から」、九条家関連の人物が制作者・享受者であろうと推測されている(文献3)。近世以降の所持者については、文献1に詳しい。

二、先行研究

本絵巻は、複製本が出版されるまで、ほとんど世に知られていな

かった。図版として、二枚の絵が紹介されたことがあつたに過ぎない。

しかし、一九八四年の複製本出版によつて、研究は、大きく進展した。

1. 本文の成立と編者

文献1で、「阿字功能」は、覺鑊(一〇九五―一四三)の『阿字観』を引用したものであろうことが指摘された。

ただし、文献1は、覺鑊『阿字観』を、底本不明の『興教大師全集』(一九三五年、世相軒)とそれを訓読した『興教大師撰述集』(一九七七年、山喜房佛書林)とから引いていた。その後、『阿字観』の現存写本の調査に基づき、本資料詞書きに最も近いのは、叡山文庫蔵本であることが言われた(文献3)。この叡山文庫蔵本は、『興教大師全集』本に欠けている、「阿字義」に対応する部分をも持つ。

次に、文献3の口絵写真から、叡山文庫本『阿字観』における本資料「阿字義」相当部分を引用する。

此阿字者此阿字者是十方三世諸仏与一切衆生無二無別本性清浄理也。是則菩提心之鉢也此則法身如来此此字一切法寂静鉢不生不滅此阿字是胎藏界大日如来法界身也

文献3の指摘のとおり、本資料詞書きは、これを訓読し、仮名交じり文としたものであろう。「阿字功能」についても、「唐房法橋御消息」を除く全文が、覺鑊『阿字観』の読み下し文であるといえる。この点は、文献3に詳しいため、引用は省略する。

それに続く「唐房法橋御消息」は、天台宗寺門派行円(源国輔・

唐房法橋（九八六一—一〇四七）のものと考えられている。そして、真言宗の『阿字観』と天台僧行円の消息とを同時に引用していることから、禪林寺の永観（一〇三二—一一一一）の法系に連なる人物によって、本文献が作成されたのではないかと推測された（文献1）。また、小松茂美「図版解説」（『続 日本絵巻大成 10』、所収。『続 日本の絵巻 7』にも転載）は、「永観みずからが撰述したのではなかったか」としている。

これに対し、別の可能性として、天台宗の僧が協力をし、仏教の教義のある貴族が編纂したという説が出された（文献3）。これは、「法華経と念仏」について述べた最後の文章に、教義的な一貫性が無く、詳細な説明がなくなることで、本書の詞書全体が、阿字・真言・法華経・念仏といったさまざまな内容の文章から成り立つことから、推測されたものである。このような構成は、「天台宗の阿字観に関する著作の方に認めることができた」という。

2. 書写の時期

本資料は、先に述べたとおり、いくつかの部分からなる。ただし、本文は、すべて同筆である。

本書の書写時期は、書風・画風・料紙の装飾から、文献1では、「十二世紀の後半、一一七〇〜八〇年代」と推定されている。また、文献2は、「平安時代末期、一一六〇〜一一八〇年のころ」とする。いずれにしても、成立後間もなくの書写ということになる。

3. 詞書の言語研究

文献1・2・3の研究は、詳しいもので、日本語研究にとっても、有益なことがらが記されている。

しかし、最初の複製本出版から二十年近く経つ現在も、日本語研究を主目的として本資料を活用した成果は、公表されていない⁵⁾。

また、それぞれの複製本に、釈文が付されている。ただし、当該複製本の目的から、広く一般の読解を助けるためのものである。解釈上の誤りも存し、日本語史研究のための本文として、適切ではない⁶⁾。

そこで、本稿に、翻刻と語彙索引・漢字索引を公表する次第である。以下に、今後の研究を期し、若干のことがらを記す。

三、文字・表記

本資料の本文は、本稿の翻刻のとおり、漢字と平仮名とで書かれている。

漢字平仮名交じりの本文は優美であり、その書風は、「寂蓮様」であるとされている（文献1）。

また、本文中の漢字に、豊富な片仮名および類音字の訓点が見られ、真言部分の漢字には声点が加点されている。

さらに、本文には、当該行第一字の上に、話の始まりを示す点が加点されることがある。また、本文中央に、句切り点が見られる。この上欄の点および句切り点は、はじめ墨点で加点され、その上に朱点を置いたものである。朱点が重ねられなかった墨点も、わずかながら存する。（翻刻ではこの朱墨を区別しなかった。複製本において確認願いたい。）

これらの訓点が、本文献の言語研究資料としての価値を高めている。

1. 漢字

ア. 字体

同一漢字を別字体で書いたものがある。

「釋」と「釈」、「佛」と「仏」、「華」と「花」、がそれである。

前二者の具体例は、つぎのとおりである。

釋迦牟尼佛^{シヤカムニホケ} (172) 釈迦仏^{シヤカホケ} (173)

初出例では、「釋迦牟尼佛」と書き、次の行では、「釈迦仏」としている。「シヤカムニホトケ」という正式名称の時には、「釋」「佛」を用い、略称の時には「釈」「仏」を用いている。

「華」が用いられるのは、「妙法華經」(162)の一例であり、他十

三例は、「蓮花」「法花」「法花經」「妙法蓮花」「妙法蓮花經」

と、「花」が用いられている。一六二行目の「妙法華經」は、同義の「法花經」「妙法蓮花經」の用例に先立つ。ここでも、先行例に「華」を用いたものかも知れない。

右のような点が存するため、本稿の翻字においては、右に指摘した字体差を活かした。

イ. 付訓の有無

本資料の訓点加點者は、原則として、すべての漢字に振り仮名を付そうとしたようである。振り仮名が無いことがあるのは、次の諸字である。

〔單字〕(熟語の中で当該字のみ加點がない場合を含む。)

一・三・四・五・六・八・十・百・上・佛・人・心・身・生・

申・也・無・念

〔熟字〕(語の全体が付訓されない場合を言う。)

一切・云く・阿字義・淨三業真言

衆生 (58) (52行目には加點あり)

三身如来 (120・124) (119行目には加點あり)

〔單字〕・〔熟字〕ともに、証明は難しいが、日常生活上あるいは佛教関係の文章において、常用された字・語であろう(「熟字」の「阿字義」「淨三業真言」は、題目にあたる部分であり、問題が異なる)。

〔單字〕において、「一」は全十七例、「三」は全十六例、「八」は全四例、「十」は全五例、「百」は全二例に、振り仮名が振られていない。また、「上」は、「上正覺」(82)が本資料本文における唯一例であり、加點されていない。本資料において、「上」は、漢字音「ジャウ」を示す類音字として使用される(後述)。よって、加點するに及ばないと判断されたものであろう。

他の〔單字〕は、音注加點例をも持つ。

一方、〔熟字〕の「衆生」「三身如来」は、当該例に先立つ例には、加點されている。

詳細は、漢字索引を御覧頂きたい。

2. 平仮名

助詞「とも」(一例)「ども」(三例)の「も」が、全例「ん」の字形で書かれている。その「とん」は、すべて連綿である。これに対し、「ともかくも」(170)では、「も」の字形であり、連綿にされていない。

助詞の「ヲ」を、「お」とする例が一例だけ有る。

をこなひおは (183)

他の八三例の助詞ヲは、「を」で書かれる。唯一例なので、理由の推測は困難である。

出現理由は不明である。しかし、同じく呉音読中心資料の親鸞『三帖和讃』に、「息災延命」(浄土和讃113—2)の例がある。よつて、「延命」は、現在と同じく、「エンメイ」と音読されるのが当時一般的であり、その語音が表れた可能性がある。

呉音読中心資料は、『法華経』・『大般若経』等の字音直読資料であつても、若干の漢音読を交えるのが常である。その状況と対比すると、本資料の加点到、漢音が右の一例のみである点は、注目される。

イ. 字音の実態と加點時期

先に記したごとく、訓点の加點時は、書風から、院政期とする説と鎌倉期とする説とがあつた。

そこで、院政期から鎌倉期にかけて起こつたとされている漢字音上の変化について、本資料の片仮名表記例を調査してみる。

a. 漢字音韻尾 m・n の混同

韻尾 m・n の表記は、次のとおりである。

m 韻尾

ム表記 音・含・心・男・唵・品・念 以上、七字 (三六例)

(他の表記例は、無し。)

n 韻尾

ン表記 安・因・雲・延・觀・間・言・根・純・真・身・人・尊・煩・門・輪・蓮・邊・引・善・短・本・滿・印・遠・願・見・現・散・寸・分・變・遍・便・曼

以上、三五字 (九六例)

ム表記 槃・善 以上、二字 (二例)

右のごとく、m 韻尾をム、n 韻尾をンとする古用に、原則として

適っている(具体例は、漢字索引を参照)。

n 韻尾をムとする二字の用例は、「涅槃經」(219)・「攝善法戒」(122)である。「槃」は、唯一の加點例である。ムとされるのは、梵語音写字のためであろうか。また、「善」は、他に二例のン表記例を持つ。

b. 合拗音の直音化

帰一クキ(三例)、花・華一クエ(十四例)、とされ、揺れは無い。合拗音の直音化例は、指摘できない(クワ・クワンも、当然、カ・カンとはされない)。

c. 拗音の類音字表記

本資料には、類音字として、「上」が使用されている。

「上」が加點された漢字は、「淨」(十四例)と「靜」(一例)とである。他資料同様、類音字「上」は、「ジャウ」を示したものである。

以上の三点について、本資料の漢字音は、先に仮名字体から判断した院政末期の実態を反映していると見て矛盾はない。

ウ. 本資料の特徴

本資料において注目されるのは、次のような字音注である。

衆生・純熟・術・出・寿・修して・誦する

これらは、字音直読資料・漢文訓読資料では、「衆生・純熟・術・出・寿・修・誦」とされるのが、当時一般であつた。

ところが、本資料の仮名表記は、右のごとく、当時の訓点における傾向とは異なり、和文の字音語仮名表記に通ずるものがある。

しかし、これは、特異な例ではない。それまで、平仮名書きされることが普通であつた和歌を片仮名で書くことが増えるのも、この

院政期である。その中で、有名な『極樂願往生歌』（一一四二年書写）には、和文的な字音表記が見られる。

また、本資料は、唇内入声を、大部分、ウ表記にしている。促音を反映した表記は、見られない。これは、和文系の表記法である。

本資料の字音表記が和文的であるのは、制作の背景に、「高貴な女性の存在」が想定されていることと関連するものである。

なお、このような字音注は、いくつかの部分に分かれる本資料の、全体に通じている。よって、字音注は、編者あるいは書写者が一括して加点したものである。

以上、本資料の字音注から、当時の字音表記が多様であったことが知られる。そしておそらく、その背景にある実際の発音にも幅があったことが推測される。本資料は、文字化されることが少ない層の発音を記したのではないかと考えられる。

五、文法

本資料は、平安中後期の和文をもととした「文語文法」、あるいは院政期の漢文訓詁法に、おおよそ適っている。

動詞をうける「得」は、「……すること」等と、「こと」を取る。

また、「供養す」も、「……を供養す」である。

六、語彙

原則としてすべての漢字に振り仮名が存する点が、語彙研究にとっても、有意義である。

1. シヤカムニホトケ・シヤカホトケ

たとえば、仏教関係語が仮名文に使われたときの読みを知らることができる。これらは、『今昔物語集』等の仮名交じり文では漢字で書かれるのみで読みを知り得ない。また、『色葉字類抄』等の国語辞書には掲載されることが少ない。さらに、字音直読資料では、当然、すべて音読される。

ところが、本資料によって、「釋迦牟尼佛」「釈迦佛」は、「シヤカムニホトケ」「シヤカホトケ」と読まれていたことが知られる。『法花百座聞書抄』には、「尺迦牟尼仏ケ」（裏330）の例があり、『梁塵秘抄』には、「釋迦牟尼ほとけ」「尺迦牟にほとけ」等の例がある。さらに、和文の仮名表記にも、「やくしほとけ」（御物本『更級日記』一ウ4）などの類例を指摘できる。

本資料の例を加えることによって、この場合、音訓混読が特殊ではなかったことを確認できる。

2. 「御」の読み

しばしば問題とされる、尊敬語「御」の読みにも、用例を提供してくれる。

本資料では、「御願」（211）を「コクワン」とする以外は、付訓全七例、すべて「ラム」と読んでいる。

御消息(97)・御すかた(113)・御名(123)・御心(149・209)
御いのり(209)・御こと(214)

3. ハワ(母)

また、貴重な例として、「母」(237)がある。

『日本国語大辞典』（第二版）には、「はわ」「ハワ」と表記さ

れた例に、元永本『古今集』・保延本『法華經單字』・『古本説話集』・『日蓮遺文』等を、挙げてゐる。また、亀井孝「ハワからハハへ」（「言語文化」四（一九六七年十一月））。後、『亀井孝論文集3』に所収）には、「古今訓点抄に、「ハハ」のおどり字にこれを「ワ」とよむべきむね注している」との指摘がある。同様な例は、毘沙門堂本『古今集注』（鎌倉時代末く南北朝期写本）八八五番歌の詞書きにも見られる。

本資料の例は、「ハワ」の比較的古い用例として、これらに加えられる。

なお、本資料の「ハワ」は、「母」に対する振り仮名として表れる。本行を「は、」とする場合（89行目）は、それと同じく「ハ、」と付訓している。

4. 「和文語」「漢文訓読語」

『源氏物語』と『大慈恩寺三藏法師伝』訓点本との語彙の比較によつて導き出された「和文語」「漢文訓読語」の対は、本資料中に、つぎのように表れる。

「和文語」——「漢文訓読語」

やうなり (196・211) — ごとし (26・28・29・35・45・55・107・140・142・146) 149・157・158

す (180・192・205・214・215・231) ・さす (198・205・210) — しむ (39)

「やうなり」「す・さす」は、「淨三業真言」に続き、題目部分が欠損している「法華經の安樂世界と念仏」について記した部分のみ表れる。それ以前は、「ごとし」「しむ」のみである。そして、「やうなり」「す・さす」が使用される部分には、「ごとし」「し

む」は出現しない。

先に述べた如く、「やうなり」「す・さす」を用いた部分は、それ以前の、阿字・真言について説いた部分と内容的にも異なつていた。

その他、「和文語」とされる次の諸語も、この部分にのみ出現する。

いみじ (208) ・もしは (208) ・おはします (229・231)

いと (236) ・いといと (228) ・はべり (補助動詞的な用例。170

・177・184・201等。ただし、99行目の消息引用文にも見られる。) 候 (補助動詞的な用例。197・216・236)

そして、「漢文訓読語」とされる次のものは、「法華經の安樂世界と念仏」について記した部分よりも前(166行目以前)にのみ、出現する。

いまだ・・・(否定) (12・34) ・なをし・・・(25)

まさに・・・べし (57) ・あたはず (60) ・きたる (63・65) ・

やうやく (67) ・もとも (87) ・うやまふ (164)

よつて、本資料の全体は、語彙についても、一樣ではない。

七、文章・文体

先に、本資料の「阿字義」「阿字功能」「阿字観」を訓読したものであることを述べた。

近年、漢文訓点本とその仮名書き本(延書本)との言語を比較する研究が盛んである。『法華經』『観無量寿經』『論語』などの漢文、あるいは『往生要集』『選択本願念佛集』などの和化漢文と、それらを漢字仮名交じり文にしたものが、研究資料とされている。

本資料の「阿字義」「阿字功能」の部分は、和化漢文『阿字観』の仮名書き本として、それらに加えられることになる。短文ながら、和化漢文を読み下した仮名書き本の現存資料としては、比較的古いものである。²¹⁾

これに続く、「浄三業真言」の一六六行目までは、出典が存したものでどうか不明である。しかし、「漢文訓読語」が見られることは、先述の通りであり、何らかの典拠が存するものかも知れない。

最後の部分、一六七行目以降は、文献3が指摘するとおり、文体が明らかに異なる。文献3は、この部分を、「在家者によつて執筆された」と推定する。説明の後、「かのこといとくえう(要)におはします」と、念押しをするなど、特定の個人に申し上げる形の丁寧な文章である。この部分に典拠があつたとは考えにくい。

以上、筆者の力不足のため、繁簡さまざまな上、不十分な解説となつた。

本資料が、日本語の研究資料として活用されることを願う。

注

(1) 『密教辞典』(一九七五年、法蔵館)、『密教大辞典 増訂版』(一九六九年、法蔵館)等、参照。

(2) 沼本克明「梵語の四声点の機能」(『声明譜本の日本語史的研究』(二〇〇二年三月、平成11〜13年度科学研究費補助金 研究成果報告書)所収)、参照。

(3) 「国華」四五五・四五六号(一九二八年十一月)、『原色日本の美術』8(一九六八年、小学館)、『重要文化財』9

『繪画Ⅲ』(一九七四年、毎日出版社)等。

(4) 文献3には、叡山文庫蔵本について、詳しいことが書かれていない。口絵写真から見ると、『国書総目録』にある元和六年(一六二〇)写本かと思われる。写真により、原本の訓点を付す。

(5) 佐々木勇「日本漢字音史の研究法」—平安・鎌倉時代を中心にして—(『日本語学』第十九卷十一号、二〇〇〇年九月)には、注目すべき資料として、簡単に紹介されている。

(6) 『統 日本絵巻大成 10』には、尾下多美子編の詞書翻刻がある。しかし、これも、声点を省略し、漢字字体もいわゆる新字体に統一されている。また、翻刻の本文・訓点に誤りがある。なお本稿には、紙幅の都合上、釈文を掲げない。ただし、翻刻・語彙索引によつて、われわれの読解・語認定が知られ、先行釈文との相違点は明らかである。

(7) 一五三行目では、「をは」と書かれる。しかし、あるいは、親鸞の仮名遣いに通じるものかも知れない。吉沢義則「親鸞上人の写語法」(『龍谷大学論叢』一九二二年十月)、小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』一九六五年九月)、金子彰「親鸞の仮名遣い」(『国文学叢』第七六号、一九七八年一月)、参照。

(8) 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)第一部第一章、参照。

(9) 小林芳規「訓点における拗音表記の沿革」(『王朝文学』第九号、一九六三年十月)、参照。

(10) ただし、シュの仮名書き例も存する(誦^{シユ}136・聚^{シュ}122)。

(11) 高羽五郎「極楽願往生歌の拗音の表記」—漢字音考察の一ba

―「国語学」四八集、一九六二年四月）、注（5）佐々木論文、参照。

（12）「法花」^{ホケツ}（177）「法橋」^{ホケツ}（97）と、「攝善」^{セツゼン}（121）「引攝す」^{インセツ}（130）のフ表記以外は、他の全例（二八例）がウ表記である。

（13）沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』（一九九七年、汲古書院）第五部第一章、参照。

（14）文献1では、本文に覺鏤の『阿字観』には無い「男子はかみにむかひ、女子はしにもむかへり」が補入されていること、女人成仏の経文が引用されていることが、女性が関係している根拠として挙げられている。しかし、「男子はかみにむかひ、女子はしにもむかへり」に相当する文章は、叡山文庫本『阿字観』には存する。文献3は、原経文の説明が平易である点から、「貴族女性が対象であった」としている。

（15）訓点においても、平安中期角筆点^{ツノシテ}に平仮名で「すう・す・さく・さう」等の拗音表記が見られることが指摘されている（小林芳規『角筆文献の国語学的研究 研究篇』（一九八七年、汲古書院）第三章）。

（16）春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究 本文篇』（一九四二年、岩波書店）一三二頁、参照。

（17）小松英雄『日本語の歴史』（二〇〇一年、笠間書院）第三章、参照。

（18）築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（一九六三年、東京大学出版会）、参照。

（19）覺鏤『阿字観』の古写本は、『国書総目録』によれば、応永十二年（一四〇五）写の妙法院蔵本が最古のようである。

（20）中田祝夫編『仮名書き観無量寿経 知恩院蔵本影印と研究』

（一九九一年、勉誠社）、古田恵美子「同文脈に於ける語彙の位相 ―『往生要集』訓点本と仮名書き本の語彙の訳し分けについて―」（『国語と国文学』六九―十一、一九九二年十一月）・同「仏典仮名書き本に於ける、元漢文の再読字に対応する語法について ―主に『往生要集』の場合―」（松村明先生喜寿記念会編『国語研究』（一九九三年、明治書院）所収）等同氏による一連の論文、西田直樹・西田直敏編『浄福寺本仮名書き『往生要集』影印・翻刻・解説』（一九九一年、おうふう）、中田祝夫・小林祥次郎編『妙一記念館本 仮名書き法華経 研究篇』（一九九三年、霊友会）、佐々木勇「鎌倉時代における『選択本願念佛集』訓点本と仮名書き本の漢字音 ―仮名書き本に見られる親鸞の仮名遣い―」（『国語と国文学』七九―七、二〇〇二年七月）、等。

（21）文献3には、叡山文庫蔵『阿字観』が、もう一本紹介されている。それは、漢字平仮名交じりで、元禄二年（一六八九）写本である。これも、本資料とよく似た文章である。覺鏤『阿字観』の仮名書き別本と言える。

〔付記〕特別に原本閲覧のご許可を賜った上、本稿の公刊をお許し下さいました藤田美術館長はじめ美術館の皆様に対し、心より御礼申し上げます。また、委員の先生方からの御指摘により、本稿の誤りを訂正することができました。記して、深謝いたします。

（以上、佐々木勇 記）

翻字本文 凡例

一、翻字は、藤田美術館蔵『阿字義』（院政期写本）の原本および複製本（『続日本絵巻大成 10』（一九八四年、中央公論社）および『続日本の絵巻 7』（一九九〇年、中央公論社））に基づく。

一、原本の配行・字詰を保ち、底本の仮名遣いもそのままとし、歴史的仮名遣いに改めることはしていない。訓点・諸符号をもできるだけ忠実に翻字するよう努めた。しかし、製版の制約上十分でない場合がある。常に複製本と照合されんことを望む。

一、漢字の字体は、JIS規格で利用できる範囲において、通行の康熙字典所載の正字体に従うことを原則とした。
いわゆるJIS外字は、独自に作製した。

ただし、次の諸字については、原本の字体のままに、両字体を区別した。

釋―釈、佛―仏、華―花

一、平仮名・片仮名の字体は、現行の字体に改めた。

一、漢字に加えられた声点は、漢字の右下に（平）（平濁）（上）（去）として示した。

一、翻字に際し、注が必要と思われる点は、当該箇所にも「」に入れて記した。

一、翻字本文は、佐々木勇・寺田守・馬野奈緒子・小松原有子・佐藤善宏・埴憲子・西尾美紀・山内寛和で作成した。

一、製版にあたっては、金水敏氏のホームページ「[LaTeXによる古典籍のコード化のためのマクロ作成](#)」で公開されているマクロを使わせていただいた。

一、製版のものとファイル作成には、寺田守提案の方式がとられ、入力全般に亘って同氏の尽力が大きかった。

1 阿字義

2 此阿字は・是十方三世の・諸佛と・一切

3 衆生との・無二無別の・本性清淨

4 の・理なり・是則・菩提心の・躰なり・

5 是則・法身如来なり・この阿字は・

6 一切法の・寂靜の・躰にして・本不

7 生不滅なり・この阿字は・これ・胎

8 蔵界の・大日如来の・法界の・身

9 也

10 阿字功能

11 ・もし・はしめて・この字を・觀せ

12 むとときに・心いまた・純熟せずは・

13 まつゑに・蓮花を・かき・月輪の・中

14 に・阿字を・かきて・觀すへし

15 ・若人・此觀を・純熟せむ・ときには

16 この字の・ひかり・むねの・なかより・

17 四方に・散して・あまなく・十方の・

18 一切佛刹に・遍せむ・このひかりは・い

19 たゞきより・あしに・いたりて・行者

20 の・身を・めぐり・めぐらむ

21 この・阿字を・あきらかに・觀する

22 ときには・六根の・もろ／＼の・垢・みな

23 すへて・清淨に・なりぬ・六根純

24 淨にして・無垢なるかゆへに・心性

25 も・また・垢なし・なをし水精と・淨

26 月との・ことし・世間の輪の・めくる

27 ときには・一切の草木の・くたけ・

28 やふれすと・いふ事・なきかことく・

29 この阿字輪も・またかくのことく・よ

30 く一切の無明の煩惱を・のそくに・く

31 たけうせすと・いふ事なし・なか

32 ゆゑそ・八葉を觀して・おほくも

33 せす・くなくもせぬ・おほよそ・ひ
 34 との心ココロのかたちは・蓮花レンゲの・いまた・
 35 ひらけぬか・ことし・八分フンに・わかれ
 36 たるすちあり・男子オムシは・かみにむか
 37 ひ・女人ニヨシは・しもにむかへり
 38 今イマ此心ココロを・観ケンして・それを開敷カイフ
 39 せしむるなり・此八葉コハチエフは・四佛フツ・四菩ホ
 40 薩サツなり
 41 藥スライの・具足クソク・せるは・そのころあ
 42 り・蓮花レンゲ三昧マイの・心ココロ・若モシ・開敷カイフすると
 43 きには・無量ムリヤウの・法門具足ホウモンクソクす・百八
 44 三昧門マイモン・五百陀羅尼門ノタラニモンなり・かく
 45 のことき・無量無邊ムリヤウムヘンの・法門具足ホウモンクソクせ
 46 すと・いふことなし・もし諸佛シヨフツを・
 47 みたてまつらむと・おもはむひと・
 48 諸佛シヨフツを・供養クヤウしたてまつらむ
 49 と・おもはむ人・菩提ホタイを・證發シヨフツせ

50 むと・おもはむひと・諸モロ菩薩ホサツと・おな
 51 しく・うまれ・あはむと・おもはむ
 52 人・一切衆生スウシヤウを・利益リキヤクせむと・おも
 53 はむひと・一切悉地ノシツチを・えむと・おも
 54 はむひと・一切智ノチを・えむとおもは
 55 む人・かくのとき事コトを・もとめ
 56 むひととは・さらに・他タの術ズツなし・たゝ
 57 し・まさに・この阿字アジを・観ケンすへし・
 58 一切衆生の・自ミツカラ心ノココロは・もとより・このかた・
 59 清淨シヤウジヤウなれとん・無明ムミヤウの・ために・おほ
 60 ひ・かくされて・さとり・こと・あたはさ
 61 るなり・若モシ・此心ココロを・きよめつれば・
 62 すなはち・それ曼荼羅マンダラとなりぬ・
 63 餘處ヨトコロより・きたりたまふに・あら
 64 す・いまこの・阿字アジも・またほかよ
 65 りきたりたまふにあらす・たゝ心

66 より・生せるなり・定チヤウを・修スウして・そ
 の心ココロ・やうやく・きよくなる・心シム清シヤウ淨ジュ
 なるかゆへに・阿ア字ジ・なかに・現ケす・
 阿ア字ジ門モンに・いるかゆへに・大ダイ果クワ報ホウを
 70 う・ひとのよく・さつくるにあらず
 71 ・若モシ・短タン命メイのひと・日ヒ三サン時ジにニは標り消し・この字
 を・思シ惟ユイせは・長チヤウ壽スウをえむ・若モシいて
 73 いるいきの中に・此コノ字ジを・おもはゞ・壽スウ
 命メイ長チヤウ遠ユアン・なることをえむ・此コノ阿ア字ジの・
 75 菩ホ提タイ心シンは・不フ生シヤウ不フ滅メツ門モン・なるかゆへに
 76 なり・出スツ入ニウのいきに・おもはゞ・鼻ハナのう
 へ・五コ寸スンはかりに・この阿ア字ジを・觀クワンす
 78 へし・此コノ觀クワンの・下ケの功クツ徳トクは・死シにあ
 79 たれるひと・さらにかへりて・生シヤウする
 80 ことをう・中チュウの功クツ徳トクは・虚コウ空クウに・のほ
 81 りて・十ハツ方フウにあそふ・大ダイの功クツ徳トクは・す

82 なはち無ム上シヤウ正カク覺カクにいたる・この法ホウを
 83 ならはむときには・つねに・行キヤウ住ヂウ坐サ
 84 臥クワに・すへし・もし心シム中チュウに・乱ミン念レン・
 85 おほくは・かならず・この阿ア字ジを・
 86 觀クワンすへし・此コノ法ホウは・修スウ行キヤウ者シヤの・ために・
 87 もとも・急キヤウ切ゼツなり・つねに心ココロに・はな
 88 つへからず
 89 ・この阿ア字ジは・是コレ・一サイ切クツ字ジの・はゞなり・
 90 十ハツ方フウ三サン世セの・諸シヨ佛フツの・諸シヨ説ゼツの・法リ・此コノ
 91 字ジの躰タイに・あらずと・いふことなし・
 92 わつかにも・念ネムするひとは・一サイ切クツの
 93 如ニヨ來ライの・法ホウを・稱シヨウするにおなし・
 94 乃ナイ至シくろかね・いしにも・この字ジを・
 95 觀クワン念ネムすれば・よくうきき・こかねと
 96 なる
 97 唐タウ房フウ法ホウ橋ケ御ニ消息ソクニイハク云

98 かきはつるまゝになみたをち
 99 てひかこともやかゝればへらむ
 100 淨三業真言
 101 唵アム・縛ハ・婆ハ・縛ハ・輸ス・駄ダ
(二合) 唵アム・縛ハ・婆ハ・縛ハ・輸ス・駄ダ
(二合) 薩サ・縛ハ・婆ハ・縛ハ・輸ス・駄ダ
(二合) 薩サ・縛ハ・婆ハ・縛ハ・輸ス・駄ダ
 102 婆ハ・縛ハ・輸ス・度ト・含カ
(二合) 婆ハ・縛ハ・輸ス・度ト・含カ
 103 この・印イン・真言シンゴンを・観念クワンネムする・心ココロは・衆生スウシヤウ
 104 の・身シン・語意ゴイ者トイハ・もとより・きよいこと・あ
 105 きらかなる・鏡カガミの・よろつの・いろ
 106 かたち・ひとゝきに・さはりなく・うか
 107 ふへきかことし・六道ロクタク・四生シシヤウに・めくる・
 108 あひた・煩惱ボンノウ・悪業アクゴウの・ちりのために・お
 109 ほひ・かくされて・きよく・あきらか
 110 なりとん(も)・しらぬなり・身ミは・もと
 111 より・きよきかゆへに・ふたつの手テ

112 掌テを・合アハセて・蓮花レンクエの・形カタチに・つくる・蓮レン
 113 花エの・形カタチといふは・觀自在クワンジザイ・菩薩ホサツの・御ミす
 114 かななり・このゆへに・一切サイ・衆生スウシヤウの・身シン
 115 業ゴウ・おのつから・きよまはりぬ・舌シタに・
 116 さへつることは・もとより・きよかり
 117 ければ・真言シンゴンを・誦スツするかゆへに・い
 118 ひと・いふこと・きよまはりぬ・唵アムといふ
 119 事コトは・法身ホウシン・報身ホウシン・應身オウシンの・三身サンニョウ・如来ライ
 120 なり・この三身如来と・まうすは・
 121 菩薩ホサツ・戒カイの・本ホン・躰タイの・攝セツ・律リツ・儀ギ・戒カイ・攝セツ
 122 善法ゼンポフ・戒カイ・饒益ニョウイキ・有情ウジヤウ・戒カイの・三サン・聚シュ・淨ジュ
 123 戒カイの・あらはれたまへる・御名ミナなり・
 124 又マタ・唵アムといふは・歸命クキミヤウの・詞コトハなり・三
 125 身如来に・歸命クキミヤウして・我ワレを・救給スクヒタマフ
 126 へ・我ワレを・わたし・たまへと・いふなり・

141 または供養の・心なり・此字を・唱
 140 るによりて・無量の・供養雲海
 139 をなし・出して・十方聖衆を・供
 138 養し・六道の衆生を・引攝す
 137 ることなり・娑縛婆縛鞞駄薩縛達
 136 磨と・いふは・一切の法は・おのつから
 135 ひとつなり・きよく・きよしと・い
 134 ふことなり・娑縛婆縛鞞度含
 133 といふは・このゆゑに・我また・自性
 132 清淨なりと・いふなり・真言を・誦
 131 するちから・一切衆生・みなもとよ
 130 り・きよかりけるゆゑに・如意輪觀
 129 自在の・この自性清淨の法に・住し
 128 たまへるか・ことくになりぬ・心は
 127 もとより・いさきよきこと・秋の夜

155 の・雲なきそらの・満月の・ことく
 154 なりければ・六道生死の・なかき
 153 夜に・めぐりて・煩惱のくも・おほ
 152 ひかくせとん・蓮花の水にありて・
 151 水にそまさるかことく・きよくき
 150 よし・此おもひを・心にかけては
 149 おもひとおもふ心は・みなきよ
 148 い事・佛の御心の・ことくになりぬ
 147 此自心の・清淨をおもふことを・か
 146 きりなく・すくれたる事に・する
 145 なり・このゆゑに・戒經には・菩薩戒
 144 うけつる・ひとをは・第一清淨の・もの
 143 となつけ・觀無量壽經には・淨土にう
 142 まるゝ・淨業正因と・なき・法花の方便

170 ともかくも・おもはず・はへりけるを・
 169 佛ホトケをのみ・たのみたてまつりて・極樂ゴクラクは・
 168 いらしと・おもふには・あらねとん・釋迦（カは標り消し）
 167 ・としころ・三惡道アツクウには・いらむ・極樂ゴクラクには・ま
 166 り云く
 165 のは・三惡道アツクウに・をちすと・のたまへ
 164 とし・敬ウヤマヒて・疑ウタカヒを・なきらむも
 163 の・提婆品タイハホムを・きよて・きよき心ココロを・まこ
 162 善男子善女人ありて・妙法華經メウホウクエキヤウ
 161 りと・いたまへり・提婆品タイハホムには・もし・
 160 おもふかゆゑに・よには・いつるな
 159 て・清淨シヤウジヤウなることを・えしめむと・
 158 たまふかごとく・自心シシムの知見チケンを・ひらい
 157 佛ホトケのしりたまふかごとく・佛ホトケのみ
 156 品ホムには・諸佛世尊シヨフツセソソは・衆生スウシヤウをして・

185 いへるは・妙法蓮花メウホウレンクエの中に・いりはへる
 184 そ・はへりける・蓮花レンクエの中に・生シヤウすると
 183 おは・安樂行アキラクキヤウとは・なつたてまつるに
 182 こなひなれは・法花經ホウクエキヤウの・をこなひ
 181 さすなり・安樂世界アキラクセカイにいるへき・を
 180 せたまへ・は如說修行ニヨセチスウキヤウと・いふは・安樂品アキラクホムを・
 179 おもひはへる・藥王品ヤクワウホムを・見たてまつら
 178 なりければ・安樂世界アキラクセカイに・いりなむと・
 177 と・おもひえ・はへりて・法花ホクエの理リに・いる
 176 を・觀世音クワンセヨムとは・なつたてまつるなり
 175 くる・妙法蓮花經メウホウレンクエキヤウに・ゐていれたまふ
 174 の・娑婆世界シヤハセカイの人を・安樂世界アキラクセカイと・なつ
 173 とは・なつたてまつるなり・釈迦シヤカ佛ホトケ
 172 てまつる・釋迦牟尼佛シヤカムニホトケを・無量壽佛ムリヤウスウフツ
 171 安樂世界アキラクセカイとは・妙法蓮花經メウホウレンクエキヤウを・なつた

186 なり・ニ経ニといふことは・五色コシキのいと・いふ
 ことなり・五色コシキのいと者イハ・きはをさか
 187 ふ・心ココロ也・やかに・界カイと・いふことなり・安楽界アンラクセカイ
 188 といふは・安楽行アンラクキヤウを・修スして・いる・ところ
 189 なれはに・はへり・このころをしつ
 190 かに・おほしめして・念ネムしたてま
 191 つらせたまへ
 192 ・無量壽佛ムリヤウスウフツと・まうして・さる佛ホトケ・別ヘテに・
 193 まします・それを念ネムしたてまつ
 194 るなりと・おもふをは・いたつらに・こと
 195 人の・たからを・かすふらむ・ものゝやう
 196 に・益ヤクもなき・事コトになむして候サブラフ・三歸クキ
 197 といふ事コト・うけさせたまひつるひ
 198 とは・わかころを・一躰クイ三寶ホウとまう
 199 して・これを・あらはしたてまつらむ
 200

201 と・おもひはへれば・かの・一躰クイ三寶ホウ
 202 といふ・わかころの中ウチの・無量壽如ムリヤウスウニヨ
 203 来ライを・念ネムしたてまつるを・まことの・
 204 念佛ネムフツとはしはへるなり・其ソノの心ココロを・
 205 よく・まうさせたまふへきにはへり・
 206 よろつのこと・いひせめては・たゝこ
 207 のことに・まさること・さふらふましく
 208 はへり・いみしき・願ノゾクにまれ・もしは
 209 御オミいのりにまれ・すへて・御心オミココロより・を
 210 こりて・この念佛ネムフツせさせたまはむ・
 211 やうなる・二世ニセの御願オミノゾク・みたせたま
 212 ふへきことは・さふらはぬものなり・
 213 念佛ネムフツしたてまつると・申マウことは・彼カ
 214 無量壽佛ムリヤウスウフツの・御オミことを・みたてまつらせ
 215 たまひ・念ネムしたてまつらせ・たまは

216 むこそは・よく候へけれ・されと・念
 佛三昧經にはまさしく・諸法の・実
 相を・念するを・念佛と・なつくと・説
 たまへり・涅槃經には・如来常住に
 して・変易あることなきを・諸法
 の実相と・なつくと・説給へり・如来
 常住・無有變易と・いふは・佛の・無量
 壽命を・念するなり・これは・即・無量
 壽佛なり・彼無量壽如来といふは・一切
 衆生の・心の・本體の・自性清淨の・心
 といふものを・まうすなり・わか心の・
 無量壽命を・おもひたてまつるを・
 念佛とは・申也・かのこといとく・え
 うに・おはします・さも・なふらひ
 ぬへからむときには・なを・このことを

231 そ・念したてまつらせおはします
 へき
 232 物の・しむらを・くふは・大慈悲の・
 種を・たつと・經に・のたまへり・大慈の
 種と・いふは・いはゆる・佛種也・このこ
 といとかなしく・候事也云々
 233 又・一切衆生は・わか・生々世々の・父母
 を・わか・除病延命の・ためにとて・か
 へりて・そのししを・もちある・きはも
 なき・不孝のことなり
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240

一、本索引は、藤田美術館蔵『阿字義』に用いられている総ての語を、本稿の翻字本文に基づいて、収めたものである。

一、各項の記載形式は、見出し語・用例・用例の所在とした。

一、見出し語について

1. 見出し語は、平仮名で歴史的仮名遣（字音語はいわゆる字音仮名遣）で統一した。
2. 排列は、最終音節までの五十音順とした。
3. 参照項目を設け、複合語の低位要素からも検索できるようにした。
4. 見出し語は、単語を原則とした。
 - a. 漢語にサ変動詞「す」の付いた形は、一語として扱った。
 - b. 漢語に助動詞「なり」「たり」の付いた形は、二語として扱った。
 - c. 和語を語幹とするいわゆる形容動詞は、一語として認めた。
 - d. 引用されている書名などは、単語に分割せず、そのままの形で掲出した。

一、用例について

1. 用例は、「翻字本文」に基づいて掲出した。
2. 用例の所在は、「翻字本文」に基づいて、算用数字で記した。

3. 用例の引用は、以下の通りとした。

a. 自立語・付属語とも、原則として当該語のみを示した。

b. ただし、活用語は、その用法に応じて下接語（または語句）も示した。

4. 用例の排列は、以下の通りとした。

a. 活用しない語は、出現順に排列した。

b. 活用語は、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の順に排列した。

c. 同一単語で、仮名表記と漢字表記とのある場合は、仮名表記を先とし、漢字表記を後とした。

d. 漢字表記の語に振り仮名のあるものと無いものがある場合には、振り仮名のあるものを先とし、無いものを後とした。

e. 同一単語で用例の表記が全同の場合は、初出例の下に所在を記すにとどめた。

一、本索引は、広島大学日本語史研究会の以下の会員が作成した。

佐々木勇・武久康高・寺田守・馬野奈緒子・小松原有子・佐藤善宏・埴憲子・西尾美紀・宮之首聡浩・村山太郎・山内寛和

川越泰子・坂野梨絵・福田弥生・渡辺心・小林広直・土屋俊明・富田みな子・松浦尚紗・山崎真理子・山根雅子

一、索引作成の手順、製版のものとファイル作成は、寺田守提案の方式がとられ、入力全般に亘って同氏の尽力が大きかった。

いと(糸) ↓ごしきのいと
いと 《副詞》
いと
いとと 《副詞》
いとく
いのり(祈り) ↓おむいのり
いはく(云く)
云イハク
いはゆる(所謂) 《連体詞》
いはゆる
いふ(云ふ)
者イハ
いひせめて
いひと
いふ
いふこと
いふ事コト
いふなり
いふは
いふもの
いへるは

113
124
132
135
180
189
222
126
136
224
235
46
91
118
133
186
186
28
31
118
198
104
187
235
97
228
236

いま(今) 《副詞》
今イマ
いま
いまだ(未だ) 《副詞》
いまた
いみじ 《形容詞》
いみじき
いる(入る) 《四》 ↓いでい
る
いらむ
いりなむ
いりはへる
いるかゆへに
いるとき
いるところ
いるなれは
いる(入る) 《下二》
いれたまふ
いろ(色)
いろ
印イン
いん(印)
いんぜふす(引攝す)

12
34
64
38
103
105
175
177
189
181
69
185
178
167
208
12
34
64
38

引攝する
うイン
う(得)
えむ
えしめむ
う
うかぶ(浮ぶ) 《四》
うかふへき
うく(受く) 《下二》
うけさせたまひつる
うけつる
うくく(動く)
うこき
うす(失す)
うせす
うたがひ(疑) 《名詞》
疑ウタガヒ
うち(中)
中ウチ
うへ(上)
うへ

53
54
72
74
70
80
159
74
106
198
153
95
31
164
202
76
130

うまる(生る)
うまれあはむ
うまるゝ
うやまふ(敬ふ)
敬ウヤマヒ
て
うんかい(雲海)
雲海ウンカイ
うんぬん(云云)
云く
えう(要)
えう
えんめい(延命) ↓ぢよびや
うえんめい
お
おうじん(應身)
應身オウジン
おこなひ(行ひ) 《名詞》
をこなひ
おこる(興る)

166
236
128
164
154
51
181
182
119
228

をこりて 209
 おつ(落つ) 209
 をちす 165
 をちて 98
 おなじ(同じ)《形容詞》 50
 おなし 93
 おなし 50
 おのづから(自ら)《副詞》 115
 おのづから 132
 おはします(御座ます) 229
 おはします 231
 おはしますへき 229
 おほし(多し)《形容詞》 85
 おほくは 32
 おほくも 85
 おほしめす(思し召す) 191
 おほしめして 191
 おほふ(覆ふ) 108
 おほひかくされて 59
 おほひかくせとも 144
 おほよそ(凡そ) 144
 おほよそ 33
 おむ(噫)《梵語》 33

噫^{ヲム} 101
 おむいのり(御祈り) 118
 御いのり 124
 おむころ(御心) 209
 御心^{ヲムコロ} 209
 おむこと(御事) 149
 御こと^{ヲム} 209
 おむすがた(御姿) 214
 御すかた^{ヲム} 214
 おむせうそく(御消息) 113
 御消息^{ヲムセウソク} 113
 おむな(御名) 97
 御名^{ヲムナ} 97
 おもひ(思ひ)《名詞》 123
 おもひ 123
 おもひう(思ひ得) 147
 おもひえはへりて 148
 おもふ(思ふ) 177
 おもふ 177
 おもはず 170
 おもは 73
 おもは 76
 おもはむ 54
 おもひたてまつる 227
 47
 49
 50
 51
 52
 53
 54

おもひはへる 179
 おもひはへれば 201
 おもふかゆゑに 160
 おもふ心 148
 おもふこと 150
 おもふには 168
 おもふをは 195
 が《助詞》 111
 か 111
 かい(界) 188
 界^{カイ} 188
 かいきやう(戒經) 152
 戒經^{カイキヤ} 152
 かいふす(開敷す) 38
 開敷^{カイフ} 38
 開敷せしむる 42
 開敷する^{カイフ} 42
 かがみ(鏡) 105
 鏡^{カミ} 105

かぎりなし(限り無し) 150
 かきりなく 150
 かく(掛く) 147
 かけつれば 147
 かく(書く) 99
 かくれはへらむ 99
 かき 13
 かき 13
 かきて 14
 かきはつる 98
 かく(斯く)《副詞》 29
 かくのとき 55
 かくのとき 55
 かくのとき 29
 かくす(隠す) 109
 かくされて 109
 かくせとも 145
 かくす(数ふ) 196
 かくすらむ 196
 かたち(形) 106
 かたち 106
 かなし(悲し) 112
 形^{カタチ} 113
 かなしく 113
 かならず(必ず) 236

観念クワンネムすれは 95

くわんむりやうじゆきやう

(観無量壽經)

観クワンム無量リヤウスツキヤウ壽經

くのみやう(帰命)

帰命クキミヤウ

くのみやうす(帰命す)

帰命クキミヤウして

125

124

154

こく(虚空)

虚空コクウ

こくらく(極楽)

極楽コクラク

こくわん(御願)

御願コクワン

こころ(心) ↓ おむこころ

こころ

心ココロ

心

こしきのいと(五色の糸)

五色コシキのいと

こすん(五寸)

五寸コスン

こそ《助詞》

こそ

こと(事) ↓ おむこと

こと

207131
207134
212141
213150
220159
228186
230187
235188
240206

131
134
141
150
159
186
187
188
206

46
60
74
80
91
91
104
116
118

ことし《助動詞》

28
31
55
119
149
151
197
198
236

207131
207134
212141
213150
220159
228186
230187
235188
240206

ことく

ことくになりければ

ことくになりぬ

ことし

こととき

ことば(詞)

ことひと(異人)

こと人

この(此)

この

5
7
11
16
18
21
29
57

64
71
77
82
85
89
94
103
120

139
190
206
210
230
235

2
15
38
39
61
73
74
78
86

このかた(此の方)

このかた

このゆゑに(此の故に)

このゆへに

このゆゑに

こひやく(五百)

五百

これ(是)

これ

是コレ

さ

さつもく(草木)

草木サツモク

さかふ(境ふ)

さかふ

ざぐわ(坐臥) ↓ ぎやうぢう

ざぐわ

さす(指す)

さす

さす《助動詞》

させたまはむ

させたまひつる

さづく(授く)

さつくる

ささる(悟る)

ささる

さはり(障り)

さはり

さぶらふ(候ふ)

さぶらふ

2
4
5
89

7
200
223

146
157
158

140
149

26
35
107

45
55

195

124

124

195

120

120

120

86

86

58

114

152

135

44

44

106

60

70

198

210

181

181

187

27

27

さぶらはぬ 212
 さぶらひぬ 229
 候 サラフ 197
 候へけれ サラフ 216
 さぶらふましく サラフ 207
 候事 サラフコト 236
 さへひる (轉る) 116
 さへつる
 さむあくだう (三悪道) アツクダウ 165
 三悪道 167
 さむくる (三歸) クキ 197
 三歸
 さむじ (三時) シ 71
 三時
 さむじゆじやうかい (三聚淨戒) シユ上クイ 122
 三聚淨戒
 さむしんによらい (三身如来) シンニヨライ 119
 三身如来
 三身如来 120
 さむせ (三世) ↓じふほうさむせ 124

さむぼう (三寶) ↓いちたい 212
 さむぼう 229
 さむまい (三昧) ↓れんぐゑ 197
 さむまい マイ 207
 さむまいもん (三昧門) マイモン 216
 三昧門 207
 さも (然も) 《副詞》 236
 さも 229
 さりに (更に) 116
 さりに 56
 さる (然る) 《連体詞》 79
 さる 193
 さるばだるま (薩縛達磨) 《梵語》 197
 薩 サル 上 縛達 ハクル 上 磨 マ 上 薩縛達磨 サルハクルマ 131
 されど 《接続詞》 101
 されと 101
 さんず (散ず) サン 17
 散して 17

し (死) 78
 死 シ 78
 じ (字) 11
 字 ジ 11
 じ 《助動詞》 16
 じ (肉穴) 71
 しし (肉穴) 73
 しし 89
 じむ (自心) 91
 じむ ジム 94
 自心 ジム 127
 しむら (肉叢) 150
 しむら シム 158
 しむら 233
 ししやう (四生) ↓ろくだう 239
 ししやう 239
 じしやう (自性) 168
 じしやう ジシヤウ 168
 清淨 (自性) 135
 自性 ジシヤウ 清淨 シヤウ 139
 した (舌) 225
 した シタ 115
 しづかなり 《形容動詞》 190
 しづかに 190
 じつさう (実相) 217
 実相 ジツサウ 221

しつち (悉地) 53
 悉地 シツチ 53
 して 《助詞》 6
 して 24
 して 156
 して 220
 しはう (四方) 17
 しはう シハウ 17
 四方 シハウ 17
 じひ (慈悲) ↓だいじひ 39
 じふつ (四佛) 39
 じふつ ジフツ 39
 四佛 シフツ 39
 じふはう (十方) 17
 じふはう ジフハウ 17
 十方 ジフハウ 17
 じふはうさむせ (十方三世) 81
 じふはう ジフハウ 129
 十方三世 ジフハウ 2
 じほさつ (四菩薩) 39
 じほさつ ジホサツ 39
 四菩薩 シホサツ 39
 しむ (心) 61
 しむ シム 225
 心 シム 225
 しむ 《助動詞》 39
 えしめむ 39
 しむる 159
 しむしやう (心性) 24
 しむしやう シムシヤウ 24
 心性 シムシヤウ 24
 しむしやうじやう (心清淨) 39

心清淨 シムシヤウ上	67	しやうじゆ シヤウスウ	129	衆生 スウシヤウ	103 130 137 156	證發せむ シヨウホツ	49
しむちう(心中) シムチウ	84	しやうず シヤウス	66	しゆじやう(衆生) いすうじやう	↓いちさ	しよせつ(諸説) シヨセツ	90
しも(下)	37	生せる シヤウ	79	しゆす(修す) 修して	66 189	しよぶつ(諸佛) シヨブツ	2
しやういん(正因) シヤウイン	155	しやうじやうせぜ シヤウシヤウセセ	184	じゆす(誦す) 誦する	136	しよほふ(諸法) シヨホフ	46 48 90 156
じやうかい(淨戒) ゆじやうかい	↓さむじ	じやうど(淨土) 浄土	237	誦する	117	しる(知る)	217 220
しやうがく(正覚) うしやうがく	↓むじや	しやかほとけ(釋迦佛) シヤカホトケ	154	じゆつ(術) 術	56	しらぬなり	157 110
じやうこふ(淨業) 浄業	155	釋迦佛 シヤカホトケ	168	しゆつにふ(出入) 出入	76	しりたまふかごとく	8
じやうまむしんこん(淨 三業真言)	100	釈迦牟尼佛 シヤカムニホトケ	173	じゆみやう(壽命) 壽命	73	しん(身) 身	157
淨三業真言	143	じやくじやう(寂靜) 寂靜	172	じゆんじやう(純淨) 純淨	76	しんこい(身語意) 身語意	104
しやうじ(生死) 生死	143	しやばせかい(娑婆世界) 娑婆世界	6	じゆんじやう(純熟) 純熟	23	しんこふ(身業) 身業	114
しやうじやう(清淨) しやうじやう・しむ しやうじやう・ほんしやう しやうじやう	↓じ	しゆいす(思惟す) 思惟せは	174	じゆんじゆくす(純熟す) 純熟せす	73	しんこん(真言) しんこん	↓じやうさ
清淨 シヤウ上	23 59 150 153 159	しゆじやう(衆生) 衆生	72	じゆんじゆくす(純熟す) 純熟せむ	73	むごふしんこん 真言	103 117 136
		しよほうす(證發す) 稱する	93	しよほうす(證發す) 稱する	93	す	

す(為) ↓ いんせふす・かいふす・ぐそくす・くやうす・くわんす・くわんねむす・くゐみやうす・げんす・さんす・しやうす・しゆいす・しゆす・じゆす・じゆんじゆくす・しやうす・しやうほちす・ちうす・ねむす・ねむぶつす・へんす・りやくす
 せす 33
 せぬ 33
 し 164
 しはへるなり 204
 すへし 84
 するなり 151
 す 《助動詞》
 せおはします 231
 せたまはむ 215
 せたまひ 214
 せたまふ 205
 せたまへ 180
 ず 《助動詞》
 らむ 164
 すは 12

す 33
 すはへりける 170
 す 88
 すと 165
 さる 146
 さるなり 60
 ぬ 35
 ぬなり 110
 ぬもの 212
 ねとも 168
 ずい(薬) 41
 すいしやう(水精) 25
 水精 スイシヤウ
 すうだ(輸駄) 《梵語》 101
 輸(去) 駄(平濁) タ
 秣駄 スウダ
 すうどかむ(輪度含) 《梵語》 102
 輪(去) 度(平濁) 含(去) カム
 秣度含 スウトカム
 すがた(姿) ↓ おむすがた 134

すぎやうざ(修行者) 86
 修行者 スウキヤウシャ
 すくなし(少なし) 33
 くなくも 33
 すくふ(救ふ) 125
 救給へ スクヒクマ
 すぐる(優る) 151
 すくれたる 36
 すち(筋) 36
 すち 36
 すなはち(則・即) 《副詞》 62
 すなはち 81
 すなはち(則・即) 《接続詞》 4
 則 スナハチ
 即 スナハチ
 すべて(總て) 23
 すへて 209
 せ 23
 せうそく(消息) ↓ おむせうそく
 せけん(世間) 204

世尊 セク
 世尊 セン
 せそん(世尊) 26
 せふぜんほふかい(攝善法戒) 156
 攝善法戒 セフゼムホウカイ
 せふりつきかい(攝律儀戒) 121
 攝律儀戒 セフリツキカイ
 せむ(責む) 121
 せめては 206
 ぜんなむし(善男子) 162
 善男子 センナムシ
 ぜんによにん(善女人) 162
 善女人 センニョ
 そ 231
 そ 《係助詞》
 その(其) 41
 その 239
 その(アは振り消し) ソノ
 其の 204
 そばはば(娑縛婆縛) 《梵語》

ち

ち (智)

智チ

ちう (中)

中チウ

ぢうす (住す)

住ヂウしたまへる

ちから (力)

ちから

ちけん (知見)

知見チケン

ちち (父)

父チチ

ぢやう (定)

定ヂヤウ

ちやうじゆ (長壽)

長壽チヤウジユ

ちやうせん (長遠)

長遠チヤウセン

ぢよびやうえんめい (除病)

除病ヂョウビヤウエンメイ

延命エンメイ

ちり (塵)

ちり

つ

つ 《助動詞》

つるひと

つれは

つき (月)

月ツキ

つくる (作る)

つくる

つねに (常に)

つねに

て

て 《助詞》

て

1971629914

20016310917

20616411219

21016912532

23917512838

17712960

18914466

19114579

19315981

108

61 153

26

112

83

87

と 《助詞》

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

21819317615411850
22119517715512051
22119817815912452
22219918016112653
22420118316513254
22620218416813362
22820418617113591
23421318817313611349
23521818917414811850

とて

となふ (唱ふ)

唱トナフるによりて

ども 《助詞》

とん

とも 《助詞》

とん

ともかくも 《副詞》

ともかくも

な

な (名) ↓おむな

ないし (乃至) 《接続詞》

乃至ナイシ

なか (中)

なか

なか

ながし (長し)

ながし

ななき夜ナナキ

なし (無し)

なく

238

127

59
145
168

110

170

94

16

13
73
184
185

143

106

常住
如来常住

ぬ

ぬ 《助動詞》

ぬ ぬへからむ

ね

ねつやくうじやうかい (饒益有情戒)

饒益有情戒

ねはんきやう (涅槃經)

涅槃經

ねむず (念ず)

念したてまつらせ

念したてまつらせ

念したてまつる

念するなり

念するひと

92 223 194 203 231 215 191 215 219 122 230 149 219 221

念するを

ねむぶつ (念佛)

念佛

ねむぶつさむまいきやう (念佛三昧經)

念佛三昧經

念佛三昧經

ねむぶつす (念佛す)

念佛せさせたまはむ

念佛したてまつる

の

の 《助動詞》 ↓ ↓ しきのいと

174149139121105 89 73 43 27 13 2 3 3 4 4 6 8 8 8
174149139121108 90 74 45 27 16 3 3 3 4 4 6 8 8 8
177150141122108 90 76 45 29 16 3 3 4 4 6 8 8 8
182153142123111 90 76 55 30 17 3 3 4 4 6 8 8 8
184155142124112 91 78 56 30 20 2 2 2 2 2 2 2 2 2
185157142127113 92 78 58 34 22 6 6 6 6 6 6 6 6 6
196157143128113 93 80 59 34 26 8 8 8 8 8 8 8 8 8
202158144130114 104 81 70 41 26 8 8 8 8 8 8 8 8 8
202163145132119 105 86 71 42 26 8 8 8 8 8 8 8 8 8

213 210 216 204 218 228 218

の

の

のぞく (除く)

のそくに

のたまふ (宣ふ)

のたまへり

のほる (昇る)

のほりて

のみ 《助動詞》

のり

のり (法)

法

は

は 《助動詞》

は

154120 85 39 2 5 7
156124 86 41 5 7
156132 89 43 7 15
160132 92 56 15 18
161135 103 58 18 22
165140 110 78 27 34
167148 113 80 34 36
167152 116 81 36 37
168153 119 83 37

90 169 80 165 234 30 97 10 225 203 225 206 226 211 233 214 233 217 234 221 237 222 238 225 240 225

ば 《助動詞》

は

は

ほうへんぼむ (方便品)

方便品

ばかり 《助動詞》

はかりに

はじめて (初めて) 《副詞》

はじめて

はちえふ (八葉)

八葉

はちぶん (八分)

八分

はつ (果つ)

はつるまゝに

はな (鼻)

鼻

はなつ (放つ)

はなつへからす

87 76 98 35 32 39 11 77 155 73 76 182 12 219 189 169 190 61 222 195 171 201 72 223 199 173 95 224 204 176 117 228 206 180 143 230 212 183 147 233 213 183 178 235 216 185 180 237 217 186

はは(母)

はは 89

母 237

はべり(侍り)

はへらむ 99

はへりける 170

はへりて 184

はへり 190

はへる 205

はへるなり 179

はへれば 204

はへる 185

ひ

ひがごと(僻事)

ひかこと 99

ひかり(光)

ひかり 16

ひと(人) ↓ことひと

ひと 18

79
92
153
198

人 15
49
52
55
174

ひとつ(一つ)

ひとつなり 133

ひとつとき(一時) 106

ひとつき 71

ひび(日々) 43

日々 158

ひやくはち(百八) 35

百八 177

ひらく(開く) 184

ひらいて 208

ひらく(開く) 179

ひらく(開く) 185

ひらけぬ 204

ふ

ふけう(不孝) 240

不孝 212

ふしやう(不生) ↓ほんふし 205

やう 181

不生 216

ふたつ(二つ) 111

ふたつ 193

ぶつ(佛) ↓しぶつ 18

ぶつせつ(佛刹) ↓いちさい 18

ぶつせつ 18

ふめつ(不滅) 7

不滅 75

ふめつもん(不滅門) 75

不滅門 75

へ

べし《助動詞》

へからす 88

へからむ 230

へし 86

へき 232

へきかことし 107

へきこと 212

へきにはへり 205

へきを 181

へけれ 216

べち(別) 193

別 193

へんす(遍す) 18

遍す 18

へんやく(変易) 18

へんやく 18

変易

ほ

ほうしん(報身)

報身 119

ほか(外・他)

ほかより 64

ぼさつ(菩薩) ↓くわんじざ 64

いぼさつ・しぼさつ 119

菩薩 119

ぼさつかい(菩薩戒) 50

菩薩戒 50

ぼだい(菩提)

菩提 121

ぼだいしむ(菩提心) 152

菩提心 49

ほとけ(仏) ↓しやかほとけ 4

しやかむにほとけ 75

佛 4

ほふ(法) 149

法 157

ほふかい(法界) 82

法 86

86
93
132
139

法界 ホウカイ 8

本不生 ホンフシヤウ 6

ほふくゑ (法花)

まします (又) 《副詞》

194

法花 ホウケ 155

ま

29
25
64
135

法花 ホウケ 177

まうす (申す)

または (又は)

127

ほふくゑきやう (法花經)

法花經 ホウケウキヤウ 182

まうさせたまふ

193
199
205

ほふけう (法橋)

まうして

まづ (先づ)

13

法橋 ホケウ 97

まうすなり

まづ (儘)

98

ほふしん (法身)

まうすは

ま

145
146

法身 ホウシン 119

申也

ま

58

ほふしんによらい (法身如来)

申ことは

まれ 《連語(係助詞「も」+動詞「ある」の命令形)》

208
209

法身如来 ホウシンニヨライ 5

まこと 《名詞》

まれ

22
137
148

ほふもん (法門)

まこと

まゐる (参る)

167

法門 ホウモン 43
45

まさし (正し)

163
203

ほんしやうしやうじやう (本性清淨)

まさしく

まいらし

142

本性清淨 ホンシヤウシヤウジヤウ 3

まさし (正に)

まんぐわつ (満月)

167

ほんたい (本体)

まさる (優る)

まんぐわつ (満月)

142

本體 ホンタイ 121
225

まさる (又)

まんぐわつ (満月)

142

ほんなう (煩惱)

まじ 《助動詞》

まんぐわつ (満月)

142

煩惱 ホンナウ 30
108
144

ましく

み (身)

142

ほんふじやう (本不生)

まします (坐します) 《動詞》

み

142

身 ミ 20

身 ミ 110

みたす (満たす)

211

みたせたまふ

84

みだれおもふ (乱れ思ふ)

211

乱念 ミダレオモヒ

84

みづ (水)

84

みづから (自ら)

145
146

自 ミツカラ

58

みな (皆)

58

みる (見る)

22
137
148

みたてまつらむ

214
47

みたてまつらせたまひ

214
47

見たてまつらせたまへ

179

みたまふ

157

み

179

む 《助動詞》

179

む (止)

179

む

179

53
54
72
74
99
159
167
200
52

18
20
47
48
50
51
52

む (体) 12 15 47 49 50 51 53
 54 55 56 83 164 210 216 230
 むうへんやく (無有変易) 222
 無有変易
 むかふ (向かふ)
 むかひ 36
 むかへり 37
 むく (無垢) 24
 無垢
 むじやうしやうかく (無上正覚) 82
 正覚
 無上正覚
 むにむへつ (無二無別) 3
 無二無別
 むね (胸) 16
 むね
 むへつ (無別) ↓ むにむへつ
 むみやう (無明) 30 59
 無明
 むりやう (無量) 43 128
 無量
 むりやうじゆによらい (無量壽如来)

無量壽如来 202 224
 むりやうじゆぶつ (無量壽佛) 172 193 214 223
 無量壽佛
 むりやうじゆみやう (無量壽命) 222 227
 壽命
 無量壽命
 むりやうむへん (無量無邊) 45
 無量無邊
 むめ

むくるあひた 107
 むくるとき 26
 も 25 29 32 33 64 92 94 99 197 239
 も 《助詞》
 もし (若し) 《副詞》
 もし 46 11 84 161
 若し 15 42 61 71 72
 もしは 《接続詞》
 もしは 208
 もちめる (用ゐる) 239
 もちめるきは 55
 もとむ (求む) 87
 もとむ (尤も) 141
 もとむ 116
 もとより (元より) 137
 もとより 196
 もとより 58 104 110 137 141
 もの (者) 153 164 196
 もの (物)

もろもろ (諸諸) 22
 もろく 50
 諸
 もの 212 226
 物
 や 《助詞》
 や 99
 やう (様) 211
 やうなる 196
 やうに
 やうやく (漸く) 67
 やうやく
 やがて 《副詞》
 やがて 188
 やかて
 やく (益) 179
 益
 やくわうぼむ (薬王品) 197
 薬王品
 やぶる (破る) 《下二》 28
 やふれす

ゆ

ゆゑ(故)

ゆへ 24
68
69
75
111
138
117
152

ゆゑ 32
135
138
160

よ

よ(世)

よ 160

よ(夜)

夜ヨ 141
144

よ(余)

ヨ 63

よく(能く)

よく 29
70
95
205
216

より《助詞》

より 16
19
63
64
66
209

よりて(因りて)

よりて 128

よろづ(万)

よろづ 105
206

ら

ら(等)《接尾語》

ら 44

らむ《助動詞》
らむ 196

り

り(理)

理リ 4
177

り《助動詞》

り 37
161
166
219
221
234

る 41
66
79
123
140
185

りやくす(利益す)

リヤク 52

りん(輪) ↓ あじりん

輪リン 26

る

る《助動詞》

れ 60
99
109

れ

れんぐゑ(蓮華)

蓮花 13
34
112
112
145
184

れんぐゑさむまい(蓮華三昧)
蓮花三昧 42

ろ

ろくこん(六根)

六根 22
23

ろくだう(六道)

六道 130
143

ろくだうししやう(六道四生)

六道四生 107

わ

わが(我)《連語(代名詞十格助詞)》

わか 199
202
226
238

わか 237

わかる(分かる)《下二》

わかれたる

わたす(渡す)《四》

わたしたまへ 126

わづかなり(僅かなり)《形容動詞》

わづかにも 92

われ(我)

我レ 125
126
135

ゐ

ゐる(率る)

ゐて 175

ゑ

ゑ(絵)

ゑ 13

を

を《助詞》

	223	199	176	159	129	93	69	46	11
	226	200	179	163	130	94	72	48	13
	227	203	180	163	136	103	72	49	14
	227	203	187	164	147	112	73	52	15
	230	204	189	169	150	117	74	53	20
	233	214	190	170	150	125	77	54	21
	234	218	194	171	153	126	80	55	30
	238	218	195	172	156	127	82	57	32
183	239	220	196	174	158	129	85	66	38

漢字索引 凡例

一、本索引は、藤田美術館蔵『阿字義』に用いられている総ての漢字を、本稿の翻字本文に基づいて、収めたものである。

一、各項の記載形式は、見出し字・用例・用例の所在とした。

一、見出し字について

1. 見出し字の字体は、翻字本文にしたがった。

ただし、翻字本文で区別した「釋―釈、佛―仏、華―花」は、検索の便宜上、用例数の多い方に一括して用例を掲げ、もう一方には、参照注記を立てた。

2. 踊り字は、漢字と見ず、対象外とした。

3. 見出し字の排列は、諸橋轍次著『大漢和辞典』にしたがった。

一、用例について

1. 用例は、翻字本文に基づいて掲出した。

2. 用例の引用は、原則として当該語のみを示した。ただし、活用語は、その用法に応じて下接語（または語句）も示した。

3. 用例の所在は、翻字本文に基づいて、算用数字で記した。

4. 用例の排列は、最終音節までの辞書順とした。

5. 用例の中、見出し字にあたる字は、「―」で示した。

一、本索引は、寺田守・小松原有子・馬野奈緒子が作成し、佐々木勇が確認した。

一、本索引の手順、製版のものとのファイル作成は、寺田守提案の方式がとられ、入力全般に亘って同氏の尽力が大きかった。

1ク	3〔他〕	2〔仏〕↓〔佛〕	2〔今〕	1イマ	1	女ニヨシ	善女ニヨシ	こと	0〔人〕	1百	1寸	1色	2〔五〕	1<	2〔云〕	1イハク	無ニ無別	1世セ	
												のいと							
56			38			174	37	162	196		44	77	186		166	236	97	3	211

2人部

7〔便〕	1ク	6〔供〕	無量壽	1ホトケ	念ニムフツ	念ニムフツ	諸ニヨフツ	諸ニヨ	釋迦牟尼ニホトケ	釋迦ニホトケ	釋迦ニホトケ	釋迦ニホトケ	四フツ	一切ニサイ	5〔佛〕	5〔余〕↓〔餘〕	如來常	行ニキヤウチウサタウ	5〔住〕							
	養													利			了	行	坐臥							
	48	127	128	129	149	157	172	193	214	222	224	235	217	228	156	2	172	173	169	39	18		219	222	139	83

1分	1葉	0〔八〕		出スツニウ	0〔入〕				攝律ニセカリツキカイ	13〔儀〕	1サフラフ	1サフラフ	1サフラフ	1サフラフ	8〔候〕	如説ニヨセチスウキヤウ	1行者	スウキヤウシヤ	1して	8〔修〕	方ニハウ
																					品
35	32	39		76					121	236	216	197	180	86	66	189					155

2八部

2入部

1サイ	2〔切〕	2〔分〕	ハ	1スツニウ	3〔出〕	1ク	6〔具〕	1の	6〔其〕	1道	1道	1根	2〔六〕	百		
27																
30																
89																
92	35			76	129		41	43	45	204	107	130	143	22	23	43

ク 能
ク 徳
3 [功]

7 [則]
スナハチ
6 [利]
一切佛

5 [利]
リヤ
益

無二無一

5 [別]
ヘチ

急

法

佛刹

衆生

衆生

衆生

衆生

2 力 部

78
80
10 81

4
5

18

52

3

193

87

6

18

58

52

137

2

114

224

53

54

237

3 [合]
アハセ
アハセ
て
薩(上)縛(上)二(平)婆(去)縛(平)

3 口 部

101

112

0 [又]
マタ

2 又 部

124

237

5 [即]
スナハチ

223

4 [印]
イン

103

2 冂 部

0 [十]
方(三)世

2

90

17
81

129

2 十 部

7 [唐]
タウハ
房

97

薬王

179

方便

156

提婆

161

163

安楽

180

6 [品]

223

227

無量壽

238

除病延

71

短

74

壽

124

125

5 [命]
帰

134

秣度

102

4 [含]
輸(去)度(平濁) | (去)

123

3 [名]
御

101

薩(上)縛(上)二(平)婆(上)縛(平)

101

3 [因]
正
シャウイン

155

六道生

107

佛

39

善薩

39

2 [四]
方

17

3 口 部

善

162

善

162

攝法戒

122

8 [噲]
フム

101

8 [唱]
トナフ
るによりて

118

124

127

浄上ト | 154

無量ムリヤウスウニョライ | 如来ニョライ | 172
無量ムリヤウスウフツ | 佛ブツ | 193
無量ムリヤウスウミヤウ | 命メウ | 202
無量ムリヤウスウミヤウ | 命メウ | 224

3 女部

3 [在] | 113

觀クワン | 自ジ | 菩薩サツ | 223
觀クワン | 自ジ | 菩薩サツ | 224

3 [地] | 53

如意輪觀ニョイリンクワン | 自ジ | 139

3 [如] | 37

善ゼン | 人ニョ | 162

4 [坐] | 83

行キヤウ | 住ヂウ | 臥ク | 222
行キヤウ | 住ヂウ | 臥ク | 220

6 [垢] | 22

無ム | 有ヨ | 141
無ム | 有ヨ | 144

9 [報] | 24

大果タイクワ | 119
大果タイクワ | 169

11 [壽] | 154

觀クワン | 無量ムリヤウスウ | 經キヤウ | 234

3 士部

0 [大] | 81

果報タイクワホウ | 69
果報タイクワホウ | 81

0 [女] | 174

慈悲タイシヒ | 171
慈悲タイシヒ | 175

3 又部

三身サンシン | 119
三身サンシン | 120
三身サンシン | 125

6 [變] | 220

說修行ニョセチスウキヤウ | 180
說修行ニョセチスウキヤウ | 138

3 夕部

來ライ | 93
來ライ | 180

3 大 部

無量壽ムリヤウスウニョライ | 202
無量壽ムリヤウスウニョライ | 224

4 [妙] | 162

法華經メウホウクエキヤウ | 162
法華經メウホウクエキヤウ | 185

0 [子] | 162

善男ゼンナム | 162
善男ゼンナム | 36

3 [字] | 68

阿ア | 77
阿ア | 75
阿ア | 85
阿ア | 89

3 子 部

提タイ | 161
提タイ | 163

8 [婆] | 174

娑婆ソハ | 174
娑婆ソハ | 175

7 [娑] | 174

娑婆世界シャハセカイ | 174

6 (息) ホンシヤウシヤウ上 本一清淨
 シムシヤウ 心一
 シムシヤウ 自一清淨
 5 (性) シンシヤウシヤウ上
 5 (急) キウセツ 一
 5 (思) シンニイ 一
 乱 ミカレラモヒ 一

204
 210
 213 92
 218 218
 228 223 231 215 95
 191
 194
 203 103
 4
 75 84 67

13 (應) タイシヒ 大一悲
 9 (慈) タイシ 大一
 9 (意) シンゴイ 身語一
 ニョイリンクワンシサイ 如一輪觀自在
 8 (惟) シンニイ 思一
 8 (情) ネウヤクウシヤウカイ 饒益有戒
 8 (悲) タイシヒ 大慈一
 三一道 アクタクウ
 7 (惡) アクコウ 業一
 7 (惱) ホンナウ 煩一
 7 (悉) シツチ 地一
 フムセウソク 御消一

233 234 138 104 72 122 233 165 167 108 30 108 144 53 97

0 (手) タナコ、ロ 掌一
 4 (房) タウハウ 唐一
 4 戸部
 3 (戒) カイキヤ 一經
 三聚淨 シュウカ
 攝善法 セフセムホウカイ 一
 攝律儀 セウリツキカイ 一
 饒益有情 ネウヤクウシヤウカイ 一
 菩薩 ホサツカイ 一
 3 (我) ワレ 一
 4 戈部
 フウシン 一身

111 97 121 152 122 121 122 123 152 125 126 135 119

11 (敷) カイフ 開一
 8 (敬) ウヤマヒ 一
 8 (散) サン 一して
 7 (救) スクヒタマ 給へ
 4 支部
 18 (攝) インセラ 引一
 善法戒 セフセムホウカイ 一
 律儀戒 セウリツキカイ 一
 菩一心 ホタイシム 菩一
 9 (提) タイハ、ホム 提一
 婆品 一
 8 (掌) タナコ、ロ 手一

38 42 164 17 125 121 121 130 4 75 49 161 163 112

0 (生) 5 部
 7 (理) 177
 7 (現) 68
 薬—品 179
 0 (王) 4 部
 4 (物) 233
 釋迦—尼佛 172
 2 (牟) 4 部
 0 (父) 4 部

4 (界) 4 部
 ナムシ 36
 善—子 162
 センナムシ 213
 2 (男) 228
 一—とは
 0 (申) 5 部
 マウス
 一—也
 六道四—
 衆—
 衆—
 不—
 フシヤウ
 ホンフシヤウ
 本不—
 ロクタクシヤウ
 六道四—

103
 130
 156
 237
 79
 184
 66
 143
 58
 137
 52
 114
 225
 237

7 (發) 5 部
 ショウホツ
 證—
 5 部
 除—延命
 チョヒヤウ
 5 部
 9 (疑) 5 部
 ウタカヒ
 法—
 ホウカイ
 胎藏—
 タイザウカイ
 娑婆世—
 シヤハセカイ
 安樂—
 アンラクセカイ
 安樂世—
 アンラクセカイ

49
 238
 164
 8
 8
 174
 188
 188
 181

7 (短) 5 部
 一—見
 チケシ
 3 (知) 5 部
 淨三業—言
 シンコン
 5 (真) 4 部
 實—
 シチサウ
 4 (相) 5 部
 利—
 リヤ
 5 (益) 5 部
 饒—有情戒
 ネウヤクウシヤウカイ
 一—
 ヤ
 1 (百) 5 部
 一—
 八

158
 103
 117
 136
 100
 218
 221
 52
 197
 122
 43
 44

タシキヤウ
命

5 石部

71

11 [磨]
娑縛婆 縛秣駄 薩縛達

132

5 禾部

4 [秋]
アキ

141

5 [秣]
スウダク
駄

131

スウトカム
度含

134

9 [種]
タネ

234
235
235

9 [稱]
シヨウ
する

93

5 穴部

3 [空]
コク
虚

80

6 竹部

5 [筴]
タイ

153

8 [精]
スイシヤウ
水

25

6 糸部

4 [純]
シユン上

シユン上
淨

23

シユンスク
熱

12
15

6 [給]
スクヒタマ

救

125

説

221

7 [經]
カイキヤ

戒

152

キヤウ

186
234

観無量壽

154

涅槃

219

ネムフツ
念佛三昧

217

ホウクエキヤウ
法花

182

メウホウクエキヤウ
妙法華

162

メウホウレンクエキヤウ
妙法蓮花

171
175

10 [縛]

薩(上)縛(上)達(上)磨(上)

101

薩(上)縛(上)合(去)縛(平)

101

薩(上)縛(上)合(去)婆(平)

101

薩(上)縛(上)合(去)婆(上)縛(平)

101

薩(上)縛(上)合(去)婆(上)平

102

娑(上)縛(上)秣(上)駄(上)薩(上)縛(上)達(上)磨

131

娑(上)縛(上)秣(上)駄(上)薩(上)縛(上)達(上)磨

131

娑(上)縛(上)秣(上)駄(上)薩(上)縛(上)達(上)磨

131

娑(上)縛(上)秣(上)度(上)含

134

娑(上)縛(上)秣(上)度(上)含

134

11 [麤]

薩(上)縛(上)達(上)磨(上)

101

6 网部

14 [羅]

陀(上)尼(上)門

44

曼茶

62

6 羊部

7 [義]

阿字

1

6 老部

4 [者]

イ

104
187

修行

19

スウキヤウシヤ

86

6 耳部

7 [聖]

如意輪觀 ニヨイリンクワンシ 觀 一在 サイ	性清淨 シシヤウシヤウ上	心 シシム	觀 クワンシ 一在菩薩 サイホサツ	0 〔自〕	行住坐 キヤウヂウサクワ 一	功 クノウ	胎 タイサウカイ 一藏界	聚 シユ上 一淨戒 カイ	家 シヤウ
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
部	部	部	部	部	部	部	部	部	部

139	135 139 225	150 158	113	84	10	7	122	129
-----	-------------------	------------	-----	----	----	---	-----	-----

妙法華經 メウホウケキヤウ	法一經 ホクエキヤウ	法一 ホクエ	法一 ホクエ	4 〔花〕	五のいと コシキ	舌 シタ	乃 ナイシ	至 ミツカラ
6	6	6	6	6	6	6	6	6
艸	艸	艸	艸	艸	色	舌	至	至
部	部	部	部	部	部	部	部	部

162	182	177	155	186 187	115	94	58
-----	-----	-----	-----	------------	-----	----	----

八 エウ	9 〔葉〕	提心 ホタイシム	提 ホタイ	薩戒 ホサツカイ	薩 ホサツ	四一薩 ホサツ	觀自在一薩 クワンシサイホサツ	8 〔菩〕	7 〔華〕 ↓〔花〕	曼羅 マンクラ	7 〔茶〕	木 サウモク	6 〔草〕	5 〔若〕 モシ	蓮一三昧 レンクエ	蓮一 レンクエ	妙法蓮一經 メウホウレンクエキヤウ	妙法蓮一 メウホウレンクエ
32 39	4 75	49	121 152	50	39	113	62	27	15 42 61 71 72	15 42 61 71 72	42	13 34 112 113 145 171 184	175 185					

娑縛娑縛秣駄一縛達磨 ソハハハハスツクサルハクルマ	菩一戒 ホサツカイ	菩一 ホサツ	一(上)縛(上)三合(上)縛(平) ソ	四菩一 ホサツ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	觀自在菩一 クワンシサイホサツ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ	一(上)縛(上)三合(去)縛(平) ソ
131	121 152	50	101	101	40	101	113	179	8	42	13 34 112 112 145 171 184	175 185							

0 〔行〕 安楽 <small>アンラク</small> キヤウ 者 <small>キヤウシヤ</small>	6 行 部	19	183 189	103 130 156	129	58	137	3 114 225 237	6 〔衆〕 一切 <small>サイスウシヤウ</small> 生 一切 <small>スウシヤウ</small> 生 一切生 聖 <small>シヤウスウ</small> 生 <small>スウシヤウ</small>	6 血 部	80	63	5 〔虚〕 空 <small>コク</small>	5 〔處〕 トコロ	16 〔藥〕 スイ
--	-------------	----	------------	-------------------	-----	----	-----	------------------------	---	-------------	----	----	-----------------------------------	-------------------	-------------------

176	21	86	32	11	113	78	82	179	158	56	180	86	83
14 57 77	14 57 77	32	32	11	113	78	82	179	158	56	180	86	83
クワン するとき	クワン すへし	クワン して	クワン せむとき	クワン 自在菩薩	クワン 観 <small>クワン</small>	無上正 <small>ムジョウテイ</small>	5 〔覚〕 無上正 <small>ムジョウテイ</small>	ミ たてまつらせたまへ	知 <small>チクシ</small> 	0 〔見〕 知 <small>チクシ</small> 	5 〔術〕 スツ	キヤウチウサクク 住坐臥 スウキヤウシヤ 者 ニョセチスウキヤウ 如説修 <small>ニョセチスウキヤウ</small>	

180	221	218	90	117	136	104	124	103 117 136	100	138	154	103	
180	221	218	90	117	136	104	124	103 117 136	100	138	154	103	
如 <small>ニョセチスウキヤウ</small> 修行	トキタマ 給へり	トキ たまへり	諸 <small>シヨセツ</small> 	7 〔説〕 諸 <small>シヨセツ</small> 	スウ する	7 〔誦〕 する	7 〔語〕 身 <small>シニコイ</small> 意	5 〔詞〕 コトハ	真 <small>シンコン</small> 	0 〔言〕 淨三業真 <small>ジヨウサンギョウシン</small>	クワンネム 念	クワンムリヤウスウキヤウ 無量壽經	クワン 如意輪 <small>ニョイリンクワンシサイ</small> 自在

104	8	125	119	119	41 43 45	49	50	217 220	156	2	90	
104	8	125	119	119	41 43 45	49	50	217 220	156	2	90	
シニコイ 語意	シ 	三 <small>シニヨライ</small> 如来	三 <small>シニヨライ</small> 如来	0 〔身〕 應 <small>オウシン</small>	7 身 部	7 足 部	12 〔證〕 ショウホツ 發せむ	シヨホツ 法	シヨフツ 佛	シヨ 佛	シヨセツ 説	8 〔諸〕 説

	寂 ⁶ シヤク 上		クモ	海 ⁴ ウシ カイ	病 ⁷ チヨビヤク ウチシ 延命	陀 ⁵ タラ ニ モ	字 ¹ ア ン シ ン 義	字 ² ア ン シ ン 門	字 ³ ア ン シ ン 輪	68 74 77 85 89	2 5 7 10 14 21 57 64
9 音 部		8 青 部			8 雨 部						
	6		142	128	238	44	29	69	1		

輸 ⁴ スウ (去)	馱 ⁴ (馱)	馬 ¹⁰ 部	益 ¹² ネウヤク ウシヤウ ウカイ 有情 戒	ヨ	餘 ⁷ (餘)	供 ⁶ クヤウ (養)	御 ⁹ コクワン (食)	願 ¹⁰ クワン (願)	觀 ⁰ クワン セ ム 世 ⁰ (音)		
101			122	63	48 127 128 130		211	208		176	

秣 ⁰ ハナ (鼻)	秣 ¹⁴ 部	
76		131

〔ささき いさむ、広島大学助教授〕
 〔てらだ まもる、広島大学大学院学生〕
 〔こまつばら ゆうこ、広島大学大学院学生〕
 〔うまの なおこ、広島大学大学院学生〕
 〔ひろしまだいがくにほんごしけんきゅうかい〕
 (平成十四年七月二十九日受理)